

# 共同行為と期待の循環

## 戦間期ドイツの社会学理論と現象学

木村 正人

現代の共同行為論の主要な論点のひとつは、意志行為を信念と欲求に還元して理解する分析哲学のミニマルな行為モデルが、社会的文脈においても適用可能であるかという点にある。還元主義モデルが困難であるのは、それが共同行為に適用されるとき、行為者相互の意図に対する期待の無限循環を帰結するか、もしくは個人に還元できない共有知識を導入するかのジレンマに陥るよう思われるからである。共同行為の成立条件として知識の共有を仮定したり、他者の意図についての信念が真であることを要請するブラットマンの議論も、あくまでその自認にもとづいて還元主義的戦略として評価するならば、論点先取の誤謬に陥っていると言わざるをえない。他者の志向的態度に対する期待の一致が蓋然的であるためには、たしかに行為決定に先立つある種の制約が共有されている必要があるからである。

とはいえ、こうした還元主義の限界を確認することは、わけても「自然的態度」における行為の記述に関心をもつものにとっては重要である。理論が想定する非現実な循環を、日常を生きる行為者は事実、フォークウェイズやレシピ的知識のような「臆見」を先取することによって乗り越えているからである。循環問題を社会秩序の問題として捉える社会科学の諸理論も、行為の実践的推論に外在する何らかの制約のシステム（遺伝的傾向性や学習による条件付け、フォーカルポイント、ヒューリスティック、文化的パターン、知識集積等）を意志決定に必要な追加の認知的資源として検討してきた。

本報告では、期待の循環という観点から、戦間期ドイツにおいて社会学が個別科学として創成される過程でなされた議論と、現象学がそれに対して果たした役割を再検討する。循環問題を1907年の時点で社会学の先決問題としたリップスの議論を振り返り、その感情移入説による解決とジンメルとの相互作用論を比較的に考察する。さらに行為論を基礎とするヴェーバーの理解社会学におけるゲマインシャフト概念と社会関係の議論、そしてそれらに対する応答として初期の現象学者たちが示したいくつかの論点を、現代の共同行為論に対する寄与として引き出してみたい。

## 初期現象学と共同行為論の接点

期待していいこと、しないほうがいいこと、  
泥臭い作業を厭わない人のための今後の課題

植村玄輝（岡山大学）

現代の共同行為論と現象学の接点を探るにあたって、初期現象学における社会哲学は有益な参照点になりうる。この系譜に属する現象学者たち、たとえばアドルフ・ライナッハやゲルダ・ヴァルターの著作では、現代の論者なら共同行為に数え入れるはずの事柄も取り上げられるのである。

しかしここで注意しなければならないのは、現代では共同行為に分類されるものをライナッハやヴァルターが扱う文脈が、同様の事例が現代の行為論において問題になる文脈とは（おそらくかなり）異なるという点である。そのため、初期現象学に対して、現代の議論にわかりやすく対応するものをあまり期待しないほうがいい。

本提題では、以上のことをライナッハとヴァルターそれぞれに即して簡単に確認したあと、初期現象学に期待してもいいことについて、主にヴァルターの議論を手掛かりにしていくつかの所見を述べる。その際に特に注目することになるのは、意図の共有を志向的对象によって説明するという発想と、共同体体験の源泉としての「社会的自己（soziales Selbst）」という考えである。また、こうした路線の研究にとって今後の課題がどのようなものになるのかについても、ごく簡単に触れたい。

共同行為論の射程  
——分析系の議論を中心に——

古田 徹也（専修大学）

本提題は、共同行為というものをめぐって主として1980年代以降に分析系（英米圏の哲学分野）で交わされてきた議論の代表例を概観しつつ、そこから大陸系の哲学にもつながる論点を探るものである。

まず、分析系の共同行為論の特徴について簡単に触れたうえで、「意図の共有」という観点から共同行為の定義を試みるマイケル・ブラットマンの議論をある程度詳しく紹介する。続いて、その定義に対するマーガレット・ギルバートやD・P・シュヴァイカートの批判を検討し、そこからさらに踏み込んだ議論を展開する。

本提題で特に着目するのは、集団それ自体を主体とする行為なるものはありうるのか、という問いである。たとえばブラットマンはこの問いに対して否定的である。逆に、ギルバートやシュヴァイカートは肯定的だが、その議論は不十分である。本提題では、彼らが想定していない種類の共同行為、すなわち、意図せずになされる共同行為というものも俎上に乗せることで、行為主体と責任主体のずれという問題や、司法における責任追及のあり方などを扱いながら、行為者としての集団それ自体という概念が非常に繊細な問題を含むことを確認する。その過程で、集団の罪というものにかんするハンナ・アレントの議論など、分析系の議論の枠組みを超える話題にも少し立ち入ることになるだろう。